

思えば 出る

私が劇団というところに入りたと思ったのは、言葉の力に魅了されたからでした。体が弱く、出席日数もぎりぎりの子ども時代。友達といえは、本の中の人物だけでした。それが母に連れられて観た初めての芝居で、生の人間が言葉で発し、物語が進んでいく事に驚いたのです。本の中の人達が、生きて動いている、と思ったのです。それがきっかけで俳優になりました。

劇団に入ってから、忘れられない言葉に、「思えば出る」というのがあります。大先輩であり、師である宇野重吉さんが教えて下さった言葉です。

芝居の下手くそな私に、その役について思いなさい、百回も千回も思いなさい、そうしているうちに、ひとりで相手にその気持ち伝わるのです、とおっしゃいました。いくら上手に演じて、心がなければ伝わらない、と言うその言葉は、私を勇気づけてくれました。他人より下手でも、その分沢山の思いを持てば、観客にはその役の気持ち伝わりと信じたのです。

こんなに長く俳優という仕事を続けていられるのも、心を大切にして演じているからかも知れないと、その言葉を教えて下さった宇野重吉さんに感謝しています。そして、それは演技の上だけでなく、日常の人とのふれあいでも重要なことだというのを、年を重ねるごとに身にしみて解ってきています。信頼出来る人間との出会い、それは心が必要続きません。そうして大切に人とき合っている、自分の人生も豊かになるのです。口先だけのおつき合いのむなしさを見抜く力がついてきました。「思えば出る」この言葉をこれからも守っていきます。



東京都生まれ。女優。劇団民藝を経てフリーに。映画、テレビ、舞台で活躍する一方で、俳人・エッセイストとしても活躍。84年には『どこまで演れば気がすもの』（潮出版社）で、日本エッセイストクラブ賞を受賞。父 エイスケ・兄 淳之介はともに作家、妹 理恵は詩人。母 あぐりは日本草分けの美容師である。